

『源氏物語』の薫衣香

— 別れの香りとしての再考 —

田 中 圭 子

序

『源氏物語』の薫衣香は、石田穰二氏が「くのえ香—明石の上のこと—」(『源氏物語論集』昭46)で皇統との関わりを指摘されて以来、公式行事での贈答などにも相応しい、高い格を備えた薫物として意識され、論じられるようになった。瀬戸宏太氏は、石田氏の同論に於ける指摘に基づきながら、蓬生巻で末摘花が贈答に用いた「昔の薫衣香」について、「王統につながる末摘花である。薫衣香は、そんな家の記憶をよびますがごとく位置しているといえよう。」(『源氏物語の薫香—末摘花と紫上をめぐる—』『国語と国文学』平4 21頁)との考えを示された。また、梅枝巻で明石上がこの高貴な薫物を調合したことの具体的な理由については、自尊心や紫の上への「対抗心」を示す用例として理解されることが一般的であるようだが、そうした格の高い薫物をその場で調合したゆえんとして、石田氏は同論で「彼女(明石上)が光源氏の妻室の一人として六条院の人たるに、また春宮の女御の生母たるにふさはしい資格を示す」(274頁)為であったと考察され、近年では藤河家利昭氏が「紫の上と明石の御方の薫物の由来が記されたのは、この薫物合わせが明石の姫君入内の準備のためであり、それぞれ養母と実母の地位を堅固なものにしておく必要があったと考えられる。そこで天皇との繋がりを示しておくことが求められたのであろう。」(『広島女学院大学大学院言語文

化論叢」第3号 平12 187頁）とされるなど、明石姫君入内に際して体裁を整える必要に迫られたことが指摘されている。

しかしながら、『源氏物語』の薫衣香には、そうした政治的、野心的な目的の達成を可能にする高貴な薫物としての性格に加え、惜別、餞別の品としての性格を読みとることもできるのではないだろうか。本稿では、蓬生、絵合並びに梅枝巻³に於ける薫衣香のあり方を再考することにより、この点について明らかにしてゆきたい。

一 蓬生巻の薫衣香

かたみに添へたまふべき身馴れ衣も、しほなれたれば、年経ぬるしるし見せたまふべきものなくて、わが御髪の落ちたりけるを取り集めて、鬢にしたまへるが、九尺余ばかりにて、いときよらなるを、をかしげなる箱に入れて、昔の薫衣香のいとかうばしき、一壺具して賜ふ。

（以下、本稿テキストは新潮日本古典集成『源氏物語』本文。右記は蓬生巻69、70頁）

末摘花は、侍従との別れに際して薫衣香を贈っている。贈答品として用いるのに適当な衣裳が手許に無かったことから、その代わりの品として、鬢とともに与えられたのである。『源氏物語』では、贈答品に衣裳が用いられる場合、また、ある人物が去り、その身につけていた衣裳が残された時などに、この衣裳に染みついた香りに注意の及ぶことがしばしばみられる。有る人物が日ごろから使っていた衣裳には、その身に備わる体臭や、衣裳自体に焚きしめるなどして移された薫物の香りが混ざり合った、その人物特有の匂いが染みついていたはずである。逆の見方をすれば、そうした匂いは、この衣裳がそれを身につけていた人物の身に親しんだものであった事を物語り、それを手にした人

に彼ないし彼女のことを思い出させる力を持った、所有者自身の嗅覚面での分身のような存在である。末摘花は、「見馴れ衣」の代わりに贈られることとなった鬘の香りの面を補う役割を担うものとして、薫衣香を「具して賜ふ」、鬘に添えて贈ったのであろう。

ところで、薫衣香が餞別の品として用いられている例は、次項で扱う総合巻冒頭の本文にも同様に見られるが、本物語以外でも、成立を先行する『宇津保物語』に於いても、次のように確認することができる。

かくて種松調せさするやう、贈物に、一所に、白銀の旅籠一かけ、山の心ばへ組みすゑて、それに唐綾・うすものなど入れて、白銀の馬に沈のゆひ鞍おきて、白銀の男に引かせたり。沈の檜破子一かけ、合薫物、沈をおなじやうに挽かせ、丁字・薫衣香・麝香などを、破子の子ごとに入れ、葉・香などを飯などのさまにて入れ、沈の男になはせたり。

(日本古典全書『宇津保物語』二 吹上上 64頁)

右記は京へ帰る貴公子達への餞別の品として、源涼の養父種松が用意した品々であるが、その中には薫衣香も含まれている。この薫物は、そうしたものものしい体裁を整えるに十分な格や質を備えたものと認識されていたのである。このような薫衣香に対する認識のあり方は、同物語の次の場面からも同様に確認し得るところである。

かくて九日の夜は、大い殿、うちの大饗のお前のものし給ふ。ここかしこより、いと清らに奉り給ふ。右大将殿、大いなる海のかたをして、蓬萊の山の下の亀の腹には、かうばしき葡萄えびを入れたり。山には黒方・侍従・薫衣香・合せたき物どもを土にて、小鳥・玉の枝、竝み立ちたり。

(前出同書四 国譲中 181頁)

右記場面では、仲忠から贈られた産養の品々の一つとして、薫衣香が登場している。また、贈答や装飾に用いられる他、その香りが実際に享受される段になっても、この薫物はさきに確認したような華やかで、しかし重々しい場面に人々が身につける衣装に移され、次のように登場している。

かくて巳の時うちくだりてのほどに、青鈍の綾の袴、柳がさねなどと清らにて、今日のうつしは、麝香たきもの、薰衣草、物ごとにしつくしたり。

(前出同書三 蔵開中 240、241頁)

御有様いといまめかし。女房二十人、童女、下仕四人づゝ、よろづいといみじう奥深く心にくき御有様なり。今の世に見え聞ゆる香にはあらで、げにこれをや古の薰衣草などいひて、世にめでたきものに言ひけんは、この薫にやとまで、押かへしめづらしう思さる。

(新編日本古典文学全集「栄花物語」一 卷第八 はつはな 435、436頁)

右記「宇津保物語」蔵開中巻本文に於いて、薰衣草は、朱雀院やその後宮らの前で俊蔭の集を披露する際に、仲忠が身にまとった「青鈍」の衣装に焚きしめられている。晴れがましい場の為の衣装に焚きしめられるという享受のあり方には、第二に挙げた「栄花物語」はつはな巻の例にも同様であり、薰衣草は、頼通と具平親王女の婚礼が執り行われた際、同親王女方の女房が衣装に焚きしめた香りとして登場している。

それではなぜ、蓬生巻では薫物の中でも特に薰衣草が選ばれ、贈られたのであろうか。薰衣草が、本文に云う「年経ぬるしるし見せたまふべきもの」として相応しいものである、と、末摘花が判断したことになるのであれば、この薰衣草の香りは、「身馴れ衣」の代わりの一つとなり得るような、長年彼女が身に親しませてきたものである可能性がある。また、常陸宮家からの心を込めた贈物として相応しい、世に珍しい品であることも考えられるが、そうなる、困窮を極める末摘花の代の常陸宮家で手に入れたとは想像し難い品、ということになり、少なくとも故父宮の代までにこの宮家にもたらされたものであると考えるべきであろう。常陸宮家に長年伝えられ、結果末摘花も長い間身に親しませてきたと考えられるはずのこの珍しい薫物には、侍従への感謝の意を込めて常陸宮家から贈られる餞別の品として、相応しい感がある。

二 絵合巻の薫衣香

絵合巻冒頭で描かれる、前齋宮の入内に際して朱雀院から贈られた品々にも、薫衣香は含まれている。

前齋院の御参りのこと、中宮の御心に入れてもよほしきこえたまふ。(中略)院はいとくちをしくおほしめせど、人わろければ、御消息など絶えにたるを、その日になりて、えならぬ御よそひども、御櫛の篋、打乱の篋、香壺の篋ども、世の常ならず、くさくさの御薫物ども、薫衣香、またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ匂ふまで、心ごとにと、のへさせたまへり。

(絵合巻 93頁)

次項で確認するところであるが、明石姫君入内を前に開催された六条院薫物比べに於いても、薫衣香を含め数種の薫物が調査されていることを考慮に加えれば、薫物は婚礼の際の贈物とされて相応しいものと考えられていたことが、まず第一に考えられよう。さて、「くさくさの御薫物ども」とされる、薫衣香を含む複数の薫物が、具体的にはどれほどの種類、どれだけの量をもって調査されたのかは、本文に明らかにされていないが、「と、のへさせたまへり」との記述から、入内に際し十分な種類と量の薫物が贈られてきたと考えることは可能であろう。即ち、詳細は後に確認するところであるが、梅枝巻で光源氏や六条院の女性達、並びに朝顔前齋院とよつて調査され、その中から選び抜かれて明石姫君の為に調えられた薫物の、種類と数量に、勝るとも劣らない準備がなされたと考えられるのではないだろうか。そのように仮定してみた上でまず注目されるのは、それだけの準備を単独で成し得たかもしれないという、朱雀院の薫物調査に於ける技量の高さである。ここで思い出されるべきは、この物語の院と同じ名で呼ばれ、かつ薫物調査の名人としてもその名を残す、史実上の朱雀院の存在であろう。「原中最秘抄」に次のような記

述が見られる。

薰物合高名人数

仁明帝承和御門是也 朱雀院 白河院 八条式部卿宮 同孫子左大将保忠 四条大納言公任 右大弁宰相公忠 内藏
 頭兼房朝臣 大江千里 故皇后宮九条右大臣女 典侍滋野直子朝臣 藏人所小舎人大和常生 寛教大僧都

〔源氏物語大成〕七所収「原中最秘抄」563頁

我が国歴史上の薰物調合の名人として、朱雀院は仁明天皇の次にその名を挙げられている。これを裏付ける事実としては、藤原範兼により平安末期に編纂されたとされる我が国の薰物指南書『薰集類抄』に、次の二種の薰物の調合法を考案した人物として、朱雀院の名が記されていることも確認できる。

侍従 (中略)

朱雀院東三条院用之。

沈四両 丁香二両 甲香一両

甘松一分三朱 麝陶一分三朱已上小。

(中略)

黒方 (中略)

朱雀院東三条院同之。

沈四両二分 薰陸一分 白檀一分

丁香二両 甲香一分 麝香一分四朱已上小。

(新校群書類従十五『薰集類抄』685～688頁)

本物語の朱雀院と史実上の朱雀院との間には、いずれも薰物調合の名手であるという他にも、特に絵合巻に関わる共通点として、前齋宮と呼ばれる立場にあつた女性との内戚關係に於ける類似を挙げることができる。物語の朱雀院が思いを寄せる前齋宮は故前坊の姫君であり、孫王であつて、彼女が入内しようとしているのは、朱雀院の弟であり、彼の次に皇位に就いた冷泉帝である。一方、史実上の朱雀院の御世に齋宮となつた徽子女王は重明親王の娘であり、齋宮を退いた後に入内した先は、史実上の朱雀院の弟である村上天皇であつた。『河海抄』には、前齋宮の入内という絵合巻での設定に類似する史実の一つとして、朱雀院と徽子女王との關係が、次のように挙げられている。

前齋宮の御まいりの事

元正天皇御時井上内親王聖武天皇太子時女養老五年為齋宮後光仁天皇納為后

光仁天皇女酒人内親王宝龜三年為齋宮後桓武天皇納之有寵

桓武天皇女朝原内親王延暦三年為齋宮後平城天皇納之

朱雀院御時徽子女王重明親王女天慶元年為齋宮後天曆朝為女御

〔紫明抄 河海抄〕「河海抄」卷八 絵合 343頁

徽子女王は、本物語に前齋宮が登場する別の場面にも影を見せる存在である。賢木巻で伊勢に下向する前齋宮とそれ同行する母六条御息所の姿は、徽子女王とその娘である齋宮規子内親王の伊勢下向にまつわる身の処し方に倣うものであるとの先学による指摘は、既に通念として広く認知されているところであろう。⁽³⁾ これらの二例を概観しただけでも、本物語の前齋宮の人物設定に徽子女王が関わりを持つことは明らかである。このことは、徽子女王と史実上の朱雀院、前齋宮と物語の朱雀院の関わりがあり方、更には史実上の朱雀院と物語の朱雀院の関わり方とも平行している。絵合巻の前齋宮の姿に史実上の徽子女王の姿が推し量られるように、物語の朱雀院のあり方にも、徽子女王と同

時代に活躍した史実上の朱雀院の、特に薫物調査の名人としての姿が思い出されるべきではないだろうか。総合巻では、冒頭の本場面以外にも、醍醐天皇宸筆の年中行事絵巻に自身の御世の出来事を描き添わせる物語の朱雀院に、実在の朱雀院の面影が重ね合わせて描かれていると言われる場面が描かれている。このことから、作者紫式部は、本巻の朱雀院について語る際に、史実上の朱雀院の姿を投影することに積極的であった、と考えることができるのである。

こうした仮説は、総合巻の朱雀院の薫衣香の特徴と、梅枝巻で語られる史実上の朱雀院の薫物の特徴に一致する点が見受けられること、更に、その特徴が物語の朱雀院に深く関わるものとして描かれているかもしれないことから、導き出されるところではないかと思う。その「特徴」とは、即ち、朱雀院ゆかりの香り、並びに朱雀院の血筋の人物にまつわる香りが、「百歩」という語を用いて形容されていることであって、逆の言い方をすれば、「源氏物語」に確認される「百歩」の語は、全て朱雀院と彼の血縁の者に関わりのある香りについて用いられている、という点である。まず、総合巻での朱雀院の薫衣香の特徴について、ここで再度確認してみたい。この薫物の調査に対する院の力の込めようは、「百歩の外を多く過ぎ匂ふまで」、百歩の先を遙かに超えたところまで、その薫香が届くものとして仕上げられていく点に明らかであった。さて、先ほどから幾度も先んじて言及している、梅枝巻薫物比べの場面には、明石上が調査した史実上の朱雀院と公忠朝臣の携わった薫衣香について、次のように記されている。

薫衣香の方のすぐれたるは、前の朱雀院のうつつさせたまひて、公忠朝臣の、ことに選びつかうまつれりし百歩の方

方

(梅枝巻 259頁)

こちらの薫衣香は、史実上の朱雀院が所有していた薫衣香の調査法を、公忠朝臣が模し、工夫を加え、結果「百歩の方」、遠くまで香気の届くような薫衣香の調査法に仕上げ、改めて元の所有者であった朱雀院に献上なさった、と記

されている。「薰集類抄」に公忠朝臣の薰衣香の方は見えるが、朱雀院との関わりが明らかでない。梅枝巻に云う朱雀院と公忠朝臣にゆかりの薰衣香の調合法が實在のものなのか、また、それが薰物指南書に記されるものと関わりを持つものであるのか否かは明らかでないが、少なくとも、梅枝巻の薰衣香は、史上上の人物にゆかりの實在のものであるかのような描き方が為されており、また、史上上の朱雀院の薰物調合の名人としての姿を受け継ぐとおぼしき本物語の朱雀院が、絵合巻で同様な特徴を持つ薰衣香を調合していることは、本文に明らかである。

次に、鈴虫巻で女三宮の持仏開眼供養の際、名香として用いられた薰物について確認してみたい。本文には次のように記されている。

後のかたに法華の曼陀羅かけたまつりて、銀の花瓶に高くことくしき花の色をと、のへてたてまつれり。名香に唐の百歩の衣香マツを焚きたまへり。
(鈴虫巻 345、346頁)

右記の名香は、「高くことくしき」、丈高く仰々しい印象の花とともに、「法華の曼陀羅」前に供えられている。この名香は、そうした花と一緒に供えられて遜色ないもの、並びに、絢爛豪華な供養のされるべきものであった。「法華の曼陀羅」⁽¹⁰⁾前の供養の品に加えられて不足のないものとして調合された結果、「百歩」という特徴を有するに至ったのかもしれない。また、女三宮の裳着の有様の仰々しさを思い出してみれば、朱雀院の血筋をひく皇女としての血筋の確かさ、身分の高さを反映しての結果であると考えられることもできるかもしれない。いずれにしても、朱雀院の娘である彼女に関わりを持つ薰物の一つには、「百歩」と云われる特徴が明記されているのである。

加えて、その女三宮を母に持つ、即ち朱雀院の孫として彼の血をひく薫が体から発する香りにも、「百歩」との形容が成されていることを確認しておこう。匂兵部卿巻に次のような記述がある。

香のかうばしきぞ、この世の匂ひならずあやしきまで、うちふるひたまへるあたり、遠く隔たるほどの追風も、まことに百歩のほかも薫りぬべきこゝちしける。誰も、さばかりになりぬる御ありさまの、いとやつればみ、たゞありなるやはあるべき

(匂兵部卿卷 170頁)

右記本文では、香りの有様を「百歩のほかにも薫りぬべき」と言い表したことに続け、薫が高い身分に生まれついた人物であることに筆が及ばされているから、ここでもまた、「百歩」という語が、その香りにゆかりの人物の血筋、即ち、朱雀院の威厳と関わりをもつて登場せられていることが理解できるのである。

「百歩」という、史実上の朱雀院にゆかりの薫物の特徴を言い表した語は、本物語の朱雀院、その娘の女三宮、並びにその息子である薫それぞれに関わりを持つ香りの特徴として、いわば引き継がれる形で登場しているのである。こうした点からも、作者が本物語の朱雀院の、特にその薫物との関わり方について描こうとした時に、薫物調査の名人としての史実上の朱雀院の姿を投影しようとすることに積極的であったと言えるのではないだろうか。詳しい考察は別の機会に譲るとして、ここではそうした可能性の存在を指摘するにとどめたい。

以上述べてきたように、史実の朱雀院と徽子女王との内戚関係を基盤の一つとして位置づけ、そこから絵合巻の、物語の朱雀院から見れば悲恋物語を派生、展開させた作者は、絵合巻冒頭で薫物調査の名人としての史実上の朱雀院の姿を本物語の朱雀院に重ねることによって、数ある薫物の中で特に意識し、力を入れて調査したとされる薫衣香の香り高さのどれほどのものであるかについて、作り物語の空想に留まらない信憑性や重々しさを伴うものとして、物語ろうとしているのである。その上で注目されるべきは、そうして物語の中でとりわけ重みのある格の高い薫物に仕立てられた薫衣香に対し、物語の朱雀院が託した思いが何であったのか、という問題である。入内は前齋院と朱雀院とを完全に引き離してしまうものであるはずであった。そのような時に衣裳に用いられる薫衣香に特に力を入れて調

合し、優れた品に完成させて贈ったのは、その香りを衣裳に身に纏う折りにふれ、自分のことを思い出して欲しい、という願いにもよるのではないだろうか。絵合巻の薫衣香は、そのような惜別の品としての役割を果たし得る薫物として、物語の朱雀院に認識されているのである。

三 梅枝巻の薫衣香

史上上の朱雀院に関わりを持つ薫衣香は、梅枝巻の薫物比べに於いても次のように登場している。

冬の御方にも、時々によれる匂ひの定まれるに消たれむもあいなしとおぼして、薫衣香の方のすぐれたるは、前の朱雀院のをうつさせたまひて、公忠の朝臣の、ことに選びつかうまつれりし百歩の方など思ひ得て、世に似ずなまめかしさを取り集めたる心おきてすぐれたりと、いづれをも無徳ならず定めたまふを、「心ぎたなき判者なめり」と聞こえたまふ。

(梅枝巻 259頁)

明石上は、時節ごとに相應しい匂いというものが決まっています、紅梅が花盛りを迎えたばかりの六条院に於いては、その花の香りを模した薫物である梅花がもてはやされるに違いなく、そんな中、六条院で「冬の御方」と呼ばれる彼女がそうした自身の立場に相應しい冬の着物や、或いはそれに反して春に似合いの薫物を調合してみせたとしても、結果的にはいずれにしてもちぐはぐな印象を与え、春の御方である紫の上が調合してくるはずの梅花には、特にひけをとってしまうであろうことを、予想したのかもしれない。その上で、これなら決して春の薫物にひけをとることはあるまいと考え、調合してきたのが、「前の朱雀院」ゆかりの薫衣香をもとに、「公忠朝臣」が工夫を凝らして百歩先にも香りが届くほど芳しい薫物に仕上げた、その薫衣香であった。

右記本文の「前の朱雀院」については、事実上の宇多天皇と見るが、それとも同じく実在の朱雀院として考えるか、或いは物語の朱雀院として理解するか、諸氏の見解は今日まで様々に為されてきた。⁽¹³⁾ また、公忠朝臣が薫衣香を奉ったとする人物として、物語の朱雀院を想定する向きも見られる。⁽¹⁴⁾ しかしながらまず第一に、近年藤河家利昭氏も指摘されたように、⁽¹⁵⁾ 薫物調合の名人として名前の上がる事実上の朱雀院をさしおいて、名前の記されない宇多天皇として「前の朱雀院」を理解しようとするのは、右記場面に物語の朱雀院の登場を強い、明石上と物語の朱雀院の繋がりを意義深く捉えようとすることに同じく、本場面の理解の為に不要な作業と言わざるを得まい。また、物語の朱雀院を公忠朝臣が薫衣香を奉った人物として考えようとすることに對しても筆者には異論がある。梅枝巻には次のような記述が見られる。

大臣は、寝殿に離れおはしまして、承和の御いましめの二つの方を、いかでか御耳には伝へたまひけむ、心にして合はせたまふ。上は、東の中の放出に、御しつらひことに深うしなさせたまひて、八条の式部卿の御方を伝へて、かたみにいどみ合はせたまふほど、いみじう秘したまへば、
(梅枝巻 254頁)

光源氏が調合するのは、自らが伝承する「承和の御いましめの二つの方」、即ち、前に確認した「薫物合名人数」にその名のあげられる仁明天皇ゆかりの黒方、侍従の二つの薫物である。紫の上も、同じく「薫物合高名人数」に名前のある「八条の式部卿の御方」、即ち仁明天皇皇子本康親王ゆかりの調合法を伝え、それらに基づいた薫物製作を行っているが、これらの二方は仁明天皇の「承和の御いましめの二つの方」を源とすると考えられており、そのせいもあるのか、二人は互いに競い合つて調合している、という。この両者と明石上の他、薫物比べのために薫物を調合した人物として名前が挙げられているのは、同じく六条院に居を構える花散里、並びに朝顔前齋院の二人であるが、彼女らの薫物については、実在の人物にゆかりの調合法か否かについての記述が添えられていない。⁽¹⁶⁾ 光源氏と紫の上、

並びに明石上の薫物については、特にそのゆかりの尊さが問題にされていると考えられよう。そう考えた上で、三人の薫物を改めて比較してみると、前者二人の薫物が実在の人物の調合法に基づくことに對し、明石上の薫物が、本物語に登場する想像上の人物と関わりのある調合法を基に製作されていると仮定して考えた場合、いくらその人物が本物語で最も高貴な人物の一人として登場する朱雀院であったとしても、他の薫物にひけをとることをさけるための工夫としては、いささか不足気味な設定であるとの印象を抱かずにはおれない。梅枝巻で明石上の薫物について作者が強調したかったことは、彼女の調合した薰衣香が、薫物の名手である実在の朱雀院と関わりを持つ高貴で優れた調合法を基本としながら、それを更に改良したのがこちらにも実在の薫物の名手、公忠朝臣である、という点であったと考へるのが、むしろ順当ではないだろうか。

さて、明石上が冬の御方として相應な薫物ではなく、実在の人物である朱雀院と公忠朝臣にゆかりの薰衣香という、時節に相應しい薫物に劣らない趣向を凝らした薫物を調合し、自身の存在を引き立たせようとしたことの背景には、どのような動機が存在すると考えられるのだろうか。本稿序文でも確認したところであるが、諸氏の諸説を思い起こせば、一つには実子の入内を前に自身の地位を高めることへの必要性を感じ、また一方では、一族の優れた遺産の顯示とその伝承を願う気持ちも抱いていたはずである。しかしながら、薰衣香そのものに対する饒別の品としての認識が本物語の他の場所に於いて見られてきたことを思い起こせば、そうした政治的、野心的な動機付け以前に、入内によって更に手に届かない所へ行ってしまう娘との別れを惜しみ、自分のことを心に留めて欲しいという、実母として当然抱くはずの素朴な願いもまた、数ある季節感にとらわれない薫物¹⁸の中で、特に薰衣香を選択したことの原因の一つとして数えることができるのではないだろうか。結果的には淑景舎で明石姫君に仕えることを許される明石上であるが、本巻薫物比べの時点では、まだそのことについて知る由も無い。この時の彼女にとって、入内は姫君との決定

的な別れを意味していたはずである。例えば姫君が六条院に宿下がりして来たとしても、例えば初音巻で許されたような時節の贈答⁽¹⁹⁾などが、春宮の後である彼女との間で許されるとは考えにくい。このことは、明石上と六条院に宿下りしてきた前齋宮の秋好中宮との間の交流が描かれなかったことに照らし合わせてみても、明石母娘の未来として、予想し得るところである。

朱雀院の調合法を知り伝える明石上であるから、薰衣香以外の薰物に関しても、同様に高貴で珍しい調合法を伝えていたと考えることもできるはずだが、あえて薰衣香を調合したのは、他の薰物と違って薰衣香が季節感という規制を受けられないものであったからこそ人の注意を引くことができるからであったし、また、この薰物が、前項までに確認できたように、餞別、惜別の品としての役割を果たし得るものであると考えたからではないだろうか。薰衣香は、その名の通り衣裝に薰き染めるのに用いられることが専らであったことが想像される。このことは、これまで本稿で確認してきた薰衣香の用途が、香りそのものを楽しむという実用の場に於いて、衣裝に薰き染めて用いられていることしか見られなかったことから理解できる。明石上は、実の娘との決定的な別れに際し、自分の香が他の物から抜きんでて引き立つことで、優れた薰物として入内を前に準備される品の一つに選び抜かれ、入内の後、明石姫君に重用され、折に触れ実用の機会を得、その衣裝の香りとして親しまれることにより、少しでも多く、姫君の心に自らのことが思い出されることを願ったのではないだろうか。紫の上らにことさら対抗しようとしたゆえんは、光源氏をめぐっての女としての意地や、高貴な文化を伝えることの自尊心によるところも大きいだろうが、同時に、明石姫君との別れを惜しみ、彼女に忘れられたくないという、母親としての痛切な願いも、薰衣香調合の動機として秘められていたに違いない。

結

【源氏物語】に登場する薫衣香は、第一に蓬生巻で筑紫へ下る侍従への感謝の意を込めて常陸宮家から贈られる饒別の品として贈答に用いられた。また第二には、絵合巻でも朱雀院から入内する前齋宮への惜別の気持ちを含めた贈り物として登場することが認められ、そして第三に、梅枝巻でも同様に、明石上が入内する明石姫君との別れを惜しむ気持ちを含め、薫衣香から推し量ることができた。従来、格の高さや伝承との関わりが取りざたされることの中心であった薫衣香であったが、「別れの香り」に相応しいものとしても理解され、享受されているのである。

(1) 問題は二つある。一つは、くのえ香は、常陸宮と、朱雀院ないし朱雀院からの伝承といふかはりに於てしか、物語に現れない、といふ点である。皇室関係の特殊な伝承と作者は考へてゐたのではないか。(273頁)

(2) 例えば、【源氏物語評釈】には次のような概説が成されている。

明石の上は「冬の御方」と呼ばれるから、黒方か落葉方の冬の香を合わせるのがふさわしいが、「時々によれるにほひのさだまれるに、消たれむもあいなし」と思つて、故意に冬の香を避けたのであるが、ちょうど春の季節であるのに、冬の香を合わせては、春の風情に心を尽くす紫の上の香に圧倒されてしまふであらうから。(中略) 明石の上は受領階級の娘で、身分は劣るが気位は高い。だから紫の上に対しても、自らを卑下したりしない。同じ六条の院に住みながら姫君の入内の時まで一度も、紫の上に御機嫌伺いをしていない。そのように気位の高い人であるから、時宜を得た紫の上の香に圧倒されることを、「あいなし」と思つのである。でしゃばることを好まず、他の方々と挑戦することを避けて遠慮深く香を合わせる花散里と、紫の上に負けまいとの対抗意識を下に持つ明石の上。二人の性格は対照的である。

(3) 鈴虫巻に登場する「唐の百歩の薰衣香」については、以下の理由から本稿に於ける考察の対象に加ええない。まずは本文を確認しておきたい。

夏ごろ、蓮の花の盛りに、入道の姫君の御持仏どもあらはし給へる、供養せさせ給。(中略) 夜の御帳の帷を四面ながら上げて、後のかたに法華の曼陀羅かけたまつりて、銀の花瓶に高くこと／＼しき花の色をと、のへてたてまつれり。名香に唐の百歩の衣香を焚きたまへり。

(鈴虫巻 345、346頁)

右記「唐の百歩の衣香」について、「源氏物語」諸本の本文は「衣香」と「薰衣香」とに大別される(「源氏物語大成」巻二 129頁)。また、例えば大安寺伽藍縁起流記資財帳に於ける左記の「衣香」のあり方、即ち「衣香」が名香として仏前に供えられた可能性を示唆する事例などを参考とした場合、右記本文を「薰衣香」登場の一例として数えることについては、はからずも疑問の生じるところである。

合衣香拾阿。仏物。

(新校群書類従19「大安寺伽藍縁起流記資財帳」72頁)

こうした問題点や疑問点が存在することを理由に、本稿では、鈴虫巻の「唐の百歩の」薰物を、「薰衣香」として理解し、考察の対象に加えることは、さけることとした。

(4)

入道、今日の御まうけ、いといかめしうつかうまつれり。人々、下の品まで、旅の装束めづらしきさまなり。いつの間にかしあへけむと見えたり。御よそひは言ふべくもあらず。御衣櫃あまたかけさぶらはす。まことの都の土産にしつべき御贈り物ども、ゆゑづきて思ひ寄りぬ隈なし。今たてまつるべき狩の装束に、

寄る波に立ちかさねたる旅衣

しほどけしとや人のいとむ

とあるを御覧じつけて、騒がしけれど、

かたみにぞ換ふべかりける逢ふことの

日数隔てむ中の衣を

とて、心ざしあるをとて、たてまつり換ふ。御身になれたるどもをつかはす。げに今一重しのばれたまふべきことを添ふる形見なめり。えならぬ御衣に匂ひの移りたるを、いかゞ人の心にもしめざらむ。

(明石巻 301、302頁)

(5) 六条御息所の伊勢同行について、例えば日本古典文学集成は、次のように頭注に記す。

歴史上は、円融天皇の貞元二年(九七七)九月十六日、齋宮規子内親王(村上天皇皇女)に、母の女御微子女王が付き添って下った例がただ一例ある。御息所の伊勢下向は、この微子女王の例に倣っているが、(下略) (賢木卷 127頁)

(6) 院にも、かゝること聞かせたまひて、梅壺に御絵どもたてまつらせたまへり。年の内の節会じものおもしろく興あるを、昔の上手どものとりぐに描ける、延喜の御手づからことの心書、せたまへるに、またわが御世のことも描かせたまへる巻に、かの齋宮の下りたまひし日の大極殿の儀式、御心にしみておぼしければ、描くべきやうくはしく仰せられて、公茂がつかうまつれるが、いといみじきをたてまつらせたまへり。(綜合卷 106、107頁)

新潮日本古典集成頭注は、右記場面について「物語の朱雀院が市場の醍醐天皇の次の帝であることを示している」(107頁)と概説する。

(7) かおりの遠くまで匂う形容。(中略) 百歩香のこととする説もあるが、薫衣香の形容と見るべきである。

『源氏物語事典』上 433頁

(8) すぐれた薫衣香の方である前朱雀院(承平の帝)の方を写し、公忠が特に選んで調合し前朱雀院に奉つたのが百歩の方というのであろう。

(藤河家利昭氏「梅枝の巻の薫物合わせと仁明帝」『広島女学院大学大学院言語文化論叢』2 平11 162頁)

「前の朱雀院」を薫物で名高い朱雀天皇と取り限り、天皇が公忠朝臣に命じてうつつさせなされたとするのが適当であらう。「うつつさせたまひて」は、(中略)写す、即ち「模して」とするのがよいであらう。

(藤河家利昭氏「梅枝の巻の「前の朱雀院」について」『広島女学院大学大学院言語文化論叢』3 平12 190頁)

(9) 薫衣香一名躰身香

(中略)

公忠朝臣(香材分量略)

能合て、絹袋に入れて、無透間き篋中に置いて、其上を又裹て、能暖て、酒作る麴のうへに置いてにははせよ。

(新校群書類従15『薫集類抄』上 690頁)

『河海抄』は梅枝巻注で、薫衣香の方として朱雀院の二方を挙げているようだが、同二方は『薫集類抄』で朱雀院の黒方、

侍従の方としてあがるものと全く同じであり、検討を要する。

(10)

法華曼荼羅威儀形色法経

中京大興善寺大廣智不空奉 詔譯

爾時毘盧遮那婆伽闍 告持金剛秘密手菩薩言。仏子志心聽說證成妙法大曼陀羅相及諸尊等滿願會方乃至威儀形色法。(中略)於壇四面、画飲食界道。又画四門。於其壇上。張設天蓋。四面懸幡二十四口。又四角。各懸幢幡四智賢瓶底黑者。盛満香水。於瓶口内。挿鮮妙花。其壇四面兩辺。各置一闍伽器。盛満香水。中著鬱金。泛諸時花。極香潔之。又於四面。

(不空)「法華曼荼羅威儀形色法経」【大正新脩大藏経】第十九卷 密教部 602頁

右記「法華曼陀羅威儀形色法経」によれば、唐に於ける法華曼陀羅への花や香による供養の様式は、まず「鮮妙」な、色鮮やかで美しい花を香水を入れた花瓶に挿し、闍伽器にも同様に香水を入れその上に季節の花を浮かべて供えられる。更に、これらに加えて四台の香炉で五種の香が焼かれて供養されるべき、というのであるから、法華曼陀羅周辺は、花と香の香りで非常に芬々とした状態であつたことがうかがえる。

(11)

御しつらひは、柏殿の西面に、御帳、御几帳よりはじめて、こ、の綾錦はませさせたまはず、唐土の後の飾りをおぼしやりて、うるはしくことしく、か、やくばかりと、のへさせたまへり。

(若菜上巻 34頁)

(12)

きさらぎの十日、雨すこし降りて、御前近き紅梅盛りに、色も香も似るものなきほどに、兵部卿の宮わたりたまへり。

(梅枝巻 255頁)

(13)

「前の朱雀院」を巡る問題点の数々は、註8に触れた藤河家利昭氏論に詳しく論じられている。古注以来、先行研究に於いて示されてきた考察の要点は、同氏の同論も含め次の通り。

①古今集に朱雀院とあるは亭子院也仍此さきの朱雀院も寛平の御事たるへき歟しかれとも若此物語の朱雀院よりさきといふ心歟承平の聖代合香を好しめ給よしみえたり

(紫明抄 河海抄)「河海抄」卷十二 梅枝 444頁

②前朱雀院は承平御門の御事也(中略) 此物語には又朱雀院ましますによりて承平の御門を前朱雀院と申也

(源氏物語古註釈叢刊)二「花鳥余情」第十八 梅枝20頁

③うつさせ給ひてとは、宇多ノ御門の御方を、延喜承平などの御代にうつさせ玉ひて、公忠朝臣のことにえらるるにこそあれ、そのうへ此物語の朱雀院、すなはち承平ノ御門に准へたるを、前の朱雀院と申すべきよしなし

〔本居宣長全集〕四 「源氏物語玉の小櫛」 446頁

④ ここの「さきの朱雀院」を、承平の帝に持つて行く必要はなく、宇多院として論理的に落ち着く。

〔池田亀鑑編「源氏物語事典」上 226頁〕

⑤ 「さきの朱雀院」と申すのは宇多上皇であろう。「朱雀院」は上皇御所の一つだが、いま、物語の中では、源氏の兄弟が住んでいて、この方を、物語は、「朱雀院」とお呼び申している。(中略)「さきの朱雀院のをうつさせたまひて」と二重敬語だから、主語は、帝か院である。それを明記しないのは、明記しなくともわかるはずという態度ゆえ、「いまの朱雀院」と考える。
(玉上琢彌氏「源氏物語評釈」六 331頁)

⑥ 公忠朝臣が実在の人名であるから、さきの朱雀院といふのも実在の人名と見るべきである。歴史上、「さきの朱雀院」の呼称を以て呼ばれた方は宇多院である。この「さきの朱雀院」は宇多院でなくてはならない。

(石田稔二氏「朱雀院のことと准拠のこと」『源氏物語論集』249頁)

⑦ 註8の藤河家利昭氏による両考察

(14)

右記「源氏物語評釈」抜粋参照

(15)

① 「うつさせ給ひて」の主語は史実上の天皇で言へば醍醐か朱雀、これをこの物語に引き直せば桐壺が朱雀で、いづれの可能性が強いかと言へば、たき物を好まれた朱雀院である可能性が強いであらう。

(石田稔二氏「くのえ香―明石の上のこと」『源氏物語論集』272頁)

(16)

② 註8の藤河家利昭氏考察
「承和の御いましめの二つの方」く考えられており」については、「花鳥余情」に次のような概説が見られる。

八条式部卿本康親王は仁明天皇の第五子(中略)源氏の君のあはせ給ほうとむらさきのうえのほうとともにし、う黒方なり いづれも承和の御いましめの方なれはかはるべきやうあるへからす た、しみなもとはおなし説なれともものち(く)にちとつ、その人の意巧によりて加減する事あるによりて次第にかはる事のある物也(註5「花鳥余情」237頁)

(17)

前齋院と花散里の調合した薫物については、左記のように記述されている。
前齋院よりとて、散り過ぎたる梅の枝につけたる御文持て参れり。(中略)沈の筥に、瑠璃の杯二つすゑて、大きにまろがしつ、入れたまへり。心葉 紺瑠璃には五葉の枝、白きには梅を選りて、同じくひき結びたる糸のさまも、なよ

ぴかになまめかしうぞしたまへる。(中略) 斎院の御黒方、さいへど、心にく、しづやかなる匂ひことなり。

(梅枝卷 255、256、258頁)

(18) 夏の御方には、人くの、かう心々にいどみたまふるなかに、数々にも立ち出でずやと、煙をさへ思ひ消えたまへる御心にて、たゞ荷葉を一種合はせたまへり。さまかはりしめやかなる香して、あはれになつかし。(同卷 258、259頁) 『薫集類抄』には、季節感や季節の風物との関わりを持たない薫物として、左記に列挙する十六種を確認することができる。

薫衣香 増損化度寺 裏衣香 承和百歩香 百和香 令人體香 浴湯香 潤面膏 甲煎 建醫師衣香 香粉 焼香
印香 供養香 金剛頂經香 觀世音菩薩留濕香 (新校群書類従15 602、707頁より集成)

(19) 姫君の御方へわたりたまへれば、童女、下仕へなど、御前の山の小松引き遊ぶ。若き人々のこ、ちども、おきどころなく見ゆ。北の御殿より、わざとがましくし集めたる鬚籠ども、破籠などたてまつれたまへり。えならぬ五葉の枝にうつる鶯も、思ふ心あらむかし。

「年月をまつにひかれて経る人に
けふ鶯の初音聞かせよ

音せぬ里の」と聞こえたまへるを、げにあはれとおぼし知る。言忌もえしたまはぬけしきなり。「この御返りは、みづから聞こえたまへ。初音惜しみたまふべきかたにもあらずかし」(中略)

ひきわかれ年は経れども鶯の

巢立ちし松の根を忘れめや

をさなき御心にまかせて、くだくしくぞある。

(初音卷 13、14頁)